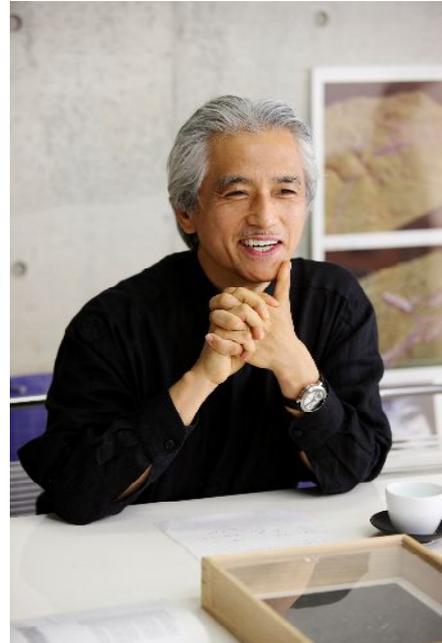


平成25年11月27日

「この人に聞く」成熟社会と建築

北川原 温（きたがわら・あつし）氏

プロフィール 1951年生まれ、長野県出身。74年東京芸術大学、77年同大学院を修了。その後、国内外で建築の活動を続けられ、82年に北川原温建築都市研究所を設立、07年にはベルリンにヨーロッパ事務所を開設。現在、東京芸術大学教授で、都市デザインから建築設計まで幅広く活躍。その間、日本芸術院賞、日本建築大賞、日本建築学会賞作品賞、公共建築賞・特別賞、BCS賞等々、受賞。15年来、木造建築の設計に注力され、木造建築による都市づくりを構想中。その成果を来る2015年ミラノ万博日本政府館で、まさにミラノチャレンジとして推進されている。



次世代公共建築研究会に新たに設置された木造部会の部会長に就任された北川原氏に、「木の建築」に関する取組みとこれからの展望について伺った。

■木の建築へのきっかけと「木造特区」構想

若い頃には田舎の自然環境というものに反発していたのですが、年をとってきたら、実家の築350年程の古い茅葺き民家で育ったせいか、やはり自然はすごいのだなということ、ひしひしと感じるようになりました。そこから木造建築に興味を持って、ここ15～20年ぐらい素人ながら取り組み、だんだんのめり込んでいきました。

現在、「木造特区」というのを真剣に考えていまして、人口5～10万人の間ぐらいの木造建築だけでできた都市、そういう夢を描けないだろうかということ、考え始めたところです。大学で地方公共団体からまちづくりの相談を

受けたり民間企業から都市計画の研究を受託したりしておりますので、その中で実現に向けた取組みができないかと、構想を進めています。地球環境を守ってゆく森に非常に関心があるものですから、豊かな森を維持していくためにも木の利活用に今取り組んでいます。

■木の魅力、特性を活かした木造建築

ヨーロッパを見ますと、ノルウェーのスターヴチャーチ（樽板工法の聖堂）などのように、分厚い板を並べたパネル（壁）構造の築 800 年以上の木造建築が残っています。また、近年では中高層建築で木造のものがありますが、やはり大きな強固なパネルを組み合わせて、木を鉄骨のように使ってジョイントを金物でガチガチに固めてしまうやり方です。いずれも 2D の構造。こうしたものは世界中にあります。

これらの例は日本人的な感覚からすると、木を使いながらも木の良さ、木の香りだとか、粘りや弾力性はほとんど考えていない。また、古来より日本の木造建築は、常に 3D、立体で考えられています。やはり日本人の空間概念が元来非常に立体的なものであるというところから来ているのでしょう。羽黒山の五重塔など、本当にすばらしい建築で、現代の建築家がこれだけのものを構想、設計するのは難しい。全体のプロポーション、そして全体とあらゆる細部の組合せと対比の美しさが完璧で、やはり日本の木造文化はすごいなと感心します。

日本の木と紙の文化は、非常に弱々しい、はかないという印象がありますが、木は実は非常に強いという丸谷博男さんによるデータもあります。圧縮や引っ張りにも曲げにも強いというデータはもちろんですが、工夫して使えば木も火に強いということもあるのです。それから、ヒーリング効果や音響効果については、既に多くの専門家が解析結果を発表しておられます。

■これまでの取組み、開発

これまで、長野県稲荷山養護学校、岐阜県森林文化アカデミー、あるいは 2005 年愛知万博の海上の森の望楼などを、地元産木材を用いてつくってきました。こうした事業の中で、木材のトレーサビリティや、良い木を育てるための森林や山の保全など、より大きな視点からの研究にも取り組んできました。

また、構造設計の稲山正弘さんによる“地獄の面格子”と呼ばれる、非常に粘りのある、めり込み作用の強い格子構造を採用しています。非常に工期が早く、金物は使いません。さらに、この面格子構造を改良して、面格子だけに頼らず、もっと微妙な揺れや地震に耐える、理想的な構造を追究してきました。そして、これを立体にしたいと考えて、計算は大変ですが、何とか挑戦してみたいとプロジェクトを構想しました。そうしているうちにミラノ万博の話がありまして、立体木格子と呼んでいる、この構造を使いたいと考えたのです。

■ミラノ万博日本政府館「ミラノチャレンジ」

「ミラノチャレンジ」というのは、2015年に開催されるミラノ国際博覧会（万博）における、日本政府館の出展に対する取組みのことです。その中で、日本政府館の建築プロデューサーをさせていただくことになりました。

プロデュース業務というのは、コンセプトとか基本的なデザインを考えることで、会期が終わるまでお手伝いすることになるわけです。プロポーザルで選定された石本建築事務所と二人三脚でいいものをつくりましょうということで進めています。その政府館については、「生命論的な木造建築」がコンセプトとなっています。

ミラノ万博のテーマが「地球に食糧を。生命にエネルギーを。」ということで、つまり「食」ということですが、日本には多彩な食文化があり、それが豊かな自然の生態系の中で発展してきた……その原点は森林であるということから、その森林保全のために木を使うことをまず思いつきまして、また、優れた日本の木の技術をヨーロッパで目に見える形にするのはいいことだな、しかも、できれば日本の材料を持っていければ、なおいいかなという思いもあって、いろいろと検討しています。

■「生命論的建築」の実現へのチャレンジ

日本の伝統的な知恵と技が木造建築には随所に見られますが、しかし、それだけでなく、今の日本の様々な先端技術と融合していけないだろうかと考えています。

また、基本的なコンセプトとして、森林の恵みが里山に栄養をもたらし、たくさんの実りが得られる。里山からさらに下流へ栄養分をたくさん含んだ

水が海に流れて行って、沿岸漁業が盛んになる。また海で蒸発した水が雨となって森林を潤す、こういう循環。まさにこれを建築で表現しようと考えています。

私たちがよく知っている近代的な建築は、ある意味では建築を機械に例えて設計している気がします。それに対して、古来の日本の木造建築というものは、少し違うのではないか。言ってみれば生命論的な発想があるのではないだろうか。なかなか機械的な計算では構造設計ができない。大工さんの感覚に依るところもあるだろうし、科学的に解明できない部分もある。それを「生命論的建築」と呼ぼうとしているわけですが、それに近いものを今回ミラノでつくろうということで、いわゆる面格子を立体化しているものですが、これを基本にして全体を組み立てています。

現在、イタリア現地で試行錯誤しながら進めています。友人であるミラノ工科大の先生に依頼して、木造加工場でモックアップを作成しているところです。はじめは、こちらの意図がイタリアの職人に全然伝わらず苦労しましたが、だんだん理解できるようになってきましたので、クオリティの高いものができそうです。